<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>越境する「偉人」 金原明善 『植民地支配における「偉人」の位置づけをめぐって』</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>伴野 文亮</td>
</tr>
<tr>
<td>言語</td>
<td>日韓相互認識</td>
</tr>
<tr>
<td>カテゴリー</td>
<td>日本語論文</td>
</tr>
<tr>
<td>タイムスタンプ</td>
<td>2015-09-10</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10086/27463">http://hdl.handle.net/10086/27463</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
越境する「偉人」
金原明善
植民地支配における「偉人」の位置づけをめぐって

伴野文亮

はじめに

本稿は、「京城日報」に掲載されたある人物の物語を事例とし、植民地支配における「偉人」顕彰の意味について考察するものである。

近代日本社会において、多くの「偉人」が「発見」され、そうした「偉人」が天皇制イテロロジーを補完する役割を果たしたという事実は、先行研究が明らかとするところである。例えば羽賀祥二氏は、木曽川の治水工事で自刃した平田朝負が「薩摩義士」として顕彰されたことを取り上げ、苦境の時代と位置づけてきた。この他にも、明治二十年代を経ての「旧藩」の顕彰が日露戦後社会において「帝国」におけるイテロロジー再編をもたらしたことを明らかにした高木百志氏による研究など、近代日本社会のなかで特定的人物・事物を顕彰する行為が近代天皇制イテロロジーを強化するものであることを究明した成果はいくつか出されている。

1

2

3

4

75
物語の主人公となる金原明善は、一八三三年（天保三）に遠江国長郡安間村に生まれた。金原家は代々の名主で、明善の父・執忠の代には「遠江屋」という生糸商を親族が共同経営するなど、いわゆる豪農であった。金原家は、佐藤家と結託して、地域の領主として知られていた。しかし、明治の改革により、地主制が崩壊し、金原家も没落した。
工手に師法を学び、『橿部絵巻』(明治4年)を手がけた。その後、工手を離れ、独自に絵を描くことを始める。数々の作品を出版し、その才能を讃えられる。
<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>タイトル</th>
<th>掲載日時</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
</table>
| 1   | 1、恐ろしい水害 | 1928年10月25日 | ・明善を「四郡百八十ヶ村の農民を全く、水地獄より救ひ得て遂に神と崇めらるゝに至つ」人物と評価。
|     |        |          | ・「知行合一」を尊んで青年・子女の教育に力を注いで毎年を過ごした人物と評価。 |
| 2   | 2、明善の幼児 | 1928年10月26日 | 頭祖と両親の人柄と幼少期の明善について記述。 |
| 3   | 3、健気な母 | 1928年10月27日 | ・死去するにあたって、父の再婚相手と明善の結婚相手を決め、また屋敷のために尽くした志士を追悼するための資金を明善に遺した母に関する記述。
|     |        |          | ・母の看護をする傍ら勉学に励んだ明善を「少年時代から、働く事を楽しみにして来たのである。」と描写。 |
| 4   | 4、人の意見をきく | 1928年10月28日 | 寺子屋に行く途中に風屋の店主から労働の楽しあと、盲目的老人から治水に関する知識を学んだという記述。
|     |        |          | 主家松平家の財政整理に従事した事について記載。 |
| 5   | 5、不真面目な社会 | 1928年10月30日 | 仕事を怠ける同僚に対して勉強に働く明善を描写。 |
| 6   | 6、家運傾く | 1928年10月31日 | 叔父が横浜に出店した生糸商店の債務整理を断行し、負債を肩代わりしたことについて記述。 |
| 7   | 7、主家のために | 1928年11月1日 | 明治維新の際、「心なくも野郎の立場に走った」主家松平家の「俗名」を疎らすために天龍川の治水事業を志願したと記述。 |
| 8   | 8、京都で活躍 | 1928年11月2日 | 上京して治水工事の許可を得るために働きかけを行、父の危篤を聞く檗が急ぎ実家に戻った明善に対し、両親がぶつりながら国家のために働く事を最優先にすべき旨を論ず。 |
| 9   | 9、遂に大洪水 | 1928年11月3日 | 天龍川の水害の様子とそれへの対応における明善の機敏性について記述。 |
| 10  | 10、明善の献策 | 1928年11月6日 | 治水工事費6万円を政府に要求し、その集金のために瀬戸・遠江・三河の住民に対して資金の借り上げを実施すべき旨を献策したことについて記述。 |
| 11  | 11、大満くだる | 1928年11月7日 | 工事の様子について記述。 |
| 12  | 12、努力と忍耐 | 1928年11月9日 | 明治天皇の東行に際し、大勢の人間が堤防工事に参加したと記述。
|     |        |          | 手際よく工事を指揮した明善を天皇が斎戒、斎戒された明善が一層工事に精力を注ぐようになったと「聖恩」を強調する描写。 |
| 13  | 13、父の死 | 1928年11月10日 | 浜松に出張した徳川家達の求めに応じ500円寄付したと記述。
|     |        |          | 天龍川水下総代に就任し工事に精力した旨記載。 |
| 14  | 14、熱烈なる郷土愛（上） | 1928年11月13日 | 工事に精力する明善を、「熱烈なる郷土愛」を持って地方自治に尽くした人物として評価。 |
| 15  | 15、熱烈なる郷土愛（下） | 1928年11月14日 | 他界に招かれるも「天龍川は自分にとって故郷の様々なもの」と定めて固持したエピソードを記述。 |
| 16  | 15、明善の実質主義 | 1928年11月15日 | 私財を寄して学校を建設し、村内の青年を教育したことについて記述。 |
| 17  | 16、会社創立の苦心 | 1928年11月16日 | 治河協力会設立の経緯と事業内容について記述。 |
| 18  | 17、リンドウの教訓 | 1928年11月20日 | お雇い外国人へのリンドウから水源涵養林造林の必要性を教わった旨記載。 |
| 19  | 18、妙な書家 | 1928年11月21日 | 川村正平との出会いについて記述。 |
| 20 | 19, 決死の覚悟 | 1928年11月22日 | 治河協力社の不振を打開すべく上京し、川村正平と土方久元に面会して窮状を訴える。・妻玉城を「良妻賢母」的な女性として描写。 |
| 21 | 20, 全財産を献納 | 1928年11月22日 | 内務卿大久保利通と面会し、自身が所有する全財産を献納するかわりに補助金の増額を要求し、聞き入れられた旨記載。 |
| 22 | 21, 祖先の霊に詣でて | 1928年11月24日 | 土地や美術品、家具に至るまでを書き出し、財産目録を作成した旨記述。・作成した「目録」と「財産献納願書」の本文（一部）を掲載。 |
| 23 | 22, 赤誠溢れた願願 | 1928年11月25日 | 明善が作成した「願書」を、「赤誠溢れ、読む者に深い感動を与へ」と評価。・前号に引き続き「願書」の本文を掲載。 |
| 24 | 23, 望みは達せられた | 1928年11月27日 | 前号に引き続き「願願」の本文を掲載。・「願願」が受けて、国から補助金を得るに至った旨記載。 |
| 25 | 24, 天恩実に洪大 | 1928年11月28日 | 明治11年の北陸・東海道幸の折に明治天皇に「拝願し、覆賞された旨記載。 |
| 26 | 25, 一喜また一憂 | 1928年11月29日 | 補助金の打ち切り - 治河協力社に対する地域社会からの参画要請 |
| 27 | 26, 協力社の解散 | 1928年11月30日 | 治河協力社を解散し、瀬戸山の植林事業を開始。 |
| 28 | 27, 植林事業を開始 | 1928年12月2日 | 植林事業の内実について記述。 |
| 29 | 28, 素志を貫く | 1928年12月2日 | 植林植林を完了し御料林へ編入した旨記載。・私有山林「金原林」について記述。 |
| 30 | 29, 財産分配と……位記返上 | 1928年12月4日 | 財産を嫡男明徳と養子已三郎に分割相続させた旨記載。・従五位宣下を受けたが、異れ多いと位記を返上した旨記載。 |
| 31 | 30, 天城山と富士の植林 | 1928年12月5日 | 天城山と富士山麓における植林事業の内実について記述。 |
| 32 | 31, 岐阜の植林 | 1928年12月6日 | 岐阜県の根尾谷での植林活動の経緯と内実について記述。 |
| 33 | 32, 功を仏徳に帰す | 1928年12月7日 | 根尾谷植林の成功と現地に明善の顕彰碑が建てられた旨記載。 |
| 34 | 33, 薄命の者を救ふ | 1928年12月8日 | 出獄人保護会社設立による社会福祉事業開始の背景と内実について記述。 |
| 35 | 34, 明善の赤誠 | 1928年12月9日 | 「靖財財団設立趣意書」を引用しながら三芳原用水計画について記述。・勤勉に勤む明善の姿を描写。 |
| 36 | 35, 熱烈なる敬神家 | 1928年12月11日 | 位階を受けるかわりに根原神宮の改修費を出すよう政府に要請し、皇室および議会から18万円の補助金を出させた旨記載。・伊勢神宮に参拝した折、外宮から内宮まで見たという「奇談」について記載。 |
| 37 | 36, 金糸と古-stock引 | 1928年12月12日 | 自身の使い古した株引を示しながら講演活動を行い、勤勉力行の精神で事業に臨むべきを説いたと記述。 |
| 38 | 37, 晩年の明善翁 | 1928年12月13日 | 臨終間際「特旨」を以て位階を授けた「天恩」を強調。・明善の伝記を記載したものを記載。・参考文献として碧瑞琳園『金原明善翁』と水野定治『金原精神』を紹介。 |

【出典】『京都日報』所載の「天龍川の恩人 金原明善」をもとに作成。
【注】(*)の点について、15が2度表されており明らかな誤植だが、本文のまま記載した。
貫せる処世訓を示し、そこで社会道徳を強調するという目意意識のもとで、三選集も改編し刊行したと述べている。また「三選集」は木村議長に対する世間の誤解を払拭し、司海山編者を筆頭に、次郎と木村の一人を名を換え政治家としての成長を認め、司海山の姿をはっきりと見て取ることで、反共産主義者としての山田の姿をはっきりと見て取ることができるようになる。外洋は大破され、之が為め多数者の生活動揺し、人心消えと見る。以上の著作からは、山田が反共産主義を声高に主張する人物であったことがうかがえる。たとえば、「生きるの道」の「序文」で、山田は本書を「現代社会の経済組織に大変重要な、之が為め多数者の生活動揺し、人心消えを示す」と述べている。
一九二八年（昭和三年）の夏、当時京城にあった彼は、朝鮮北部を襲った大洪水の様子と被害の大ささをつぶさに見聞し、自然の脅威を改めて思い知ったという。災害は人力の能ふ限り、未然にこれを防止すべきであると断言する彼の言葉には、被災した多くの人びとにすれる深い同情の念が潜んでいたため、金原の人がなりを公表する物語を執筆したのであった。宗主国における偉人として、金原明善は、「金原治水における偉人」と認められた。

まず碧瑠璃園著『金原明善翁』、以下『碧瑠璃園本』について。同書は、一九一〇年（明治四十三）に刊行されたもので、総ページ数は三百九頁である。内容は、宮内大臣や枢密顧問官を務めた土方久元（一九三三－一九八一年）による序文から始まり、金原本人や彼が書いた紙の写真などが冒頭に掲載されている。その後は金原が定めた『家譜』や『幼時』における彼のエピソード、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四－一九六六年）、本名を渡辺勝と定めた同書について、金原の講演の筆録を収録している。作者の内容や彼に関する逸事、紹介する。最後に、あらじかの碧瑠璃園（一九六四年二十ー）
【表2】「天龍川の恩人」典拠一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>「天龍川の恩人」</th>
<th>碧瑠璃園本</th>
<th>水野本</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>1, 慎ろしい水害</td>
<td>×</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>2, 明善の幼児</td>
<td>8-13頁</td>
<td>2-3頁</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>3, 健気な母</td>
<td>13-15頁</td>
<td>4-5頁</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>4, 人の意見をきく</td>
<td>16頁</td>
<td>5-6頁</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>5, 不真面目な社会</td>
<td>18-20頁</td>
<td>7-9頁</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>6, 家運傾く</td>
<td>20-23頁</td>
<td>9-10頁</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>7, 主家のために</td>
<td>23頁</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>8, 京都で活躍</td>
<td>24-29頁</td>
<td>31-32頁</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>9, 遂に大洪水</td>
<td>29-33頁</td>
<td>32-34頁</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>10, 明善の献策</td>
<td>33-34頁</td>
<td>34-35頁</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>11, 大命くだる</td>
<td>35-37頁</td>
<td>35-36頁</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>12, 努力と隠忍</td>
<td>37-39頁</td>
<td>37-38頁</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>13, 父の死</td>
<td>39-42頁</td>
<td>38-39頁</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>14, 熱烈なる郷土愛（上）</td>
<td>42頁</td>
<td>39-40頁</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>15, 熱烈なる郷土愛（下）</td>
<td>43-44頁</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>15, 明善の実質主義</td>
<td>45-46頁</td>
<td>40頁</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>16, 会社創立の苦心</td>
<td>46-49頁</td>
<td>41-43頁</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>17, リンドウの教訓</td>
<td>49-51頁</td>
<td>43-45頁</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>18, 妙な書家</td>
<td>51-53頁</td>
<td>×</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>19, 決死の覚悟</td>
<td>53-54頁</td>
<td>45-46頁</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>20, 全財産を献納</td>
<td>55-58頁</td>
<td>46-48頁</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>21, 祖先の霊に詣びて</td>
<td>58-82頁</td>
<td>49頁</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>22, 赤誠溢れた願書</td>
<td>82-87頁</td>
<td>49-53頁</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>23, 望みは達せられた</td>
<td>87-90頁</td>
<td>55-58頁</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>24, 天恩実に洪大</td>
<td>90-96頁</td>
<td>58-62頁</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>25, 一喜また一憂</td>
<td>96-99頁</td>
<td>62-65頁</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>26, 協力社の解散</td>
<td>99-101頁</td>
<td>65-69頁</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>27, 植林事業を開始</td>
<td>114-117頁</td>
<td>70-72頁</td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>28, 素志を貫く</td>
<td>117-124頁</td>
<td>72-76頁</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>29, 財産分配と……位記返上</td>
<td>124-125頁</td>
<td>90頁、</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>103-111頁</td>
<td>218-228頁</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>30, 天城山と富士の植林</td>
<td>165-171頁</td>
<td>77-81頁</td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>31, 岐阜の植林</td>
<td>173-176頁</td>
<td>82-87頁</td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
<td>32, 功を仏徳に帰す</td>
<td>176-179頁</td>
<td>87-90頁</td>
</tr>
<tr>
<td>34</td>
<td>33, 薄命の者を救ふ</td>
<td>158-164頁</td>
<td>96-102頁</td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>34, 明善の赤誠</td>
<td>129-130頁</td>
<td>93-96頁、</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>27頁</td>
</tr>
<tr>
<td>36</td>
<td>35, 熱烈なる敬神家</td>
<td>×</td>
<td>240-243頁</td>
</tr>
<tr>
<td>37</td>
<td>36, 金盃と古根引</td>
<td>×</td>
<td>132-134頁</td>
</tr>
<tr>
<td>38</td>
<td>37, 晩年の明善翁</td>
<td>×</td>
<td>×</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【注】「碧瑠璃園本」および「水野本」のページ数は、部分的に引用されているものも含めたページ数である。
至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况

至少改善这种状况
別れて泣くもの、衣食の途を失ってうろうたへるものの、すべての水の種なたらはなかった。金原明善は、「この惨状を目撃して涙を流って起ち、「自己の所有田畑、家財道具まで売払って堤防を築き、沿岸の「四郡十八村の農民を全く、水地獄より救ひ得て遂に神の如く崇めるに至った。」これ以降、「神の如く」崇拝され
る金原の人格と、精神性について語られていく。

さて、物語を読み進めていくと、ところどころ金原を
顕彰するものは性質を異にするイデオロギーの存在に
気付く。具体的には、①「良妻賢母」的な女性像を構築
せんとするイデオロギー、②天皇の権威性を高めると
するイデオロギーの二つである。以下、それぞれ具体的に
見ていく。

①の「良妻賢母」イデオロギーは、第一話「決死の
覚悟」のなかで現れる。該当の場面は、治水工事費を工
面する政府に歎願するために上京せんとする金原が、
妻・玉城に対し、歎願の結果自分たちがいかなる境遇に
苛まれようと亦不承知はないかと訝せ。夫の質問に玉城
が答えるシーンである。

こんどの上京は自分としては一大の大事を決しよ
うと思ふから或は生きて再び帰らぬかも知れぬ。お
前に不承知はあるまい。」といった。妻の玉城はこう
述べきると 「何もものてきたふるの妻の本分であるのに何で自分の
心をためすのか」玉城は心の中では一時明善を軽
くうらみした。
電話あり。かしこくも両陛下より御紋章入りの花瓶を一対御下賜に相成つたから、是非翁の生前に伝へて賢ひ
と事で、家人も感激して翁の耳もとにこれを伝へて

明善翁の最期こそ。光栄なるか。たとへ借家にあり

とし。安らかに魂は昇天したのであつた。

金原危篤の報せが。天聴に達する。と、『特旨』によっ
て位階が授けられ、同時に天皇家の紋章に入った金原は、天
恩の鴻大なことに感謝しつつ息を引き取ったという。

そして、肉親に温かく見守られ、かつ『破格の天恩に
浴しつつ最期を迎えた金原を、山田は『光栄なるかな』
と述べるのであつた。ここでは、『破格』かつ『鴻大』な

以上これままで、『京城日報』に連載された『天龍川の恩
人』『金原明善』の内容を紹介して、そこから読み取れ
るイディオロギーの存在を確認していった。そこでみられた
のは、物語の主人公である金原を顕彰せんとするひとり
のジャーナリストの思惟であった。そればかりでない、

『破格』かつ『鴻大』であることを示しつつ、天

『天恩』をひとりの老人が蒙るという描写を通して天

ロジーの存在を看取したのであつた。それはすなわち、
『聲之攝影師 深夜』Ⅱ

故事的發展，似乎永遠都在不斷地改變。當你以為已經找到了方向，卻又會有新的挑戰出現。然而，正是這些不確定性，才使得這個故事更加吸引人。

主角的內心世界也變得越來越複雜。他開始懷疑自己過去所做的選擇，是否真的正確。他開始思考，生命的意义究竟是什麼。這些問題，讓他的心靈受到了重大的震盪。

然而，就在他快要崩潰的時候，他卻得到了一個意外的幫助。這個幫助來自於他平時最不想見到的人。這個幫助，讓他的內心得到了平靜。

故事的結局，似乎已經預設好了。但是，當你真正讀到最後一章的時候，你才知道，這其實是一個沒有預想得到的結局。這個結局，讓你對這個故事有了更深的理解。
金原翁の天龍川治水工事に携わるや、実に身命を犠牲にした山田の功績を讃え、全財産を捧げて、その実行を全財産を費やす。金原は治水事業を行なった人物であり、そのために「土を保全し、その実行を全財産を費やす。」と位置づけているのである。すなわち、山田にとっての金原は、治水事業に尽くし、犠牲をせずに、のちに治水事業を行なう人物である。山田は、治水事業を行なうにあたって、自己犠牲を厭わぬ人物として捉えられている。そこで、私益を顧みず、自己犠牲を厭わぬ人物として捉えられている。山田は、治水事業を行なうにあたって、自己犠牲を厭わぬ人物として捉えられている。
【表3】金原明善関係書物一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>西暦</th>
<th>和暦</th>
<th>静岡県外で発行された書物</th>
<th>静岡県内で発行された書物</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1878</td>
<td>明治11</td>
<td>「金原明善小伝」（『郵便報知新聞』）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1884</td>
<td>明治17</td>
<td></td>
<td>『静岡県名士列伝』</td>
</tr>
<tr>
<td>1891</td>
<td>明治24</td>
<td></td>
<td>『岳陽名士伝』</td>
</tr>
<tr>
<td>1892</td>
<td>明治25</td>
<td>『日本新豪傑伝』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1900</td>
<td>明治33</td>
<td>『実業家奇聞録』（『実業評論』13号）</td>
<td>『岳陽評論』</td>
</tr>
<tr>
<td>1901</td>
<td>明治34</td>
<td>『商海立志 明治豪商苦心談』 『立身資料 人物と長所』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1903</td>
<td>明治36</td>
<td>『立身致富信用公録』（第5編）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1905</td>
<td>明治38</td>
<td>『勉強と倹約 金原明善の性行』（『農業雑誌』915号） 『勉強と倹約 金原明善の性行（前号の続）』（『農業雑誌』916号） 『処世の心得（上）』（『農業雑誌』917号） 『処世の心得（下）』（『農業雑誌』918号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1906</td>
<td>明治39</td>
<td>『当代の傑物』 『金と業と名誉』（『農業雑誌』957号） 『講談 金原明善』（『農業世界』第8巻1号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1907</td>
<td>明治40</td>
<td>『明治十一年金原明善翁家産献納栗語書』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1910</td>
<td>明治43</td>
<td>『金原明善翁』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1911</td>
<td>明治44</td>
<td>『此騒聞 明治豪商立志百話』 『金原明善翁と免災保険』（『人道』69号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1913</td>
<td>大正2</td>
<td>『北海道農場調査』</td>
<td>『金原明善と其事業』 『和田村誌』</td>
</tr>
<tr>
<td>1914</td>
<td>大正3</td>
<td>『天龍翁調話』</td>
<td>『東海三州の人物』</td>
</tr>
<tr>
<td>1915</td>
<td>大正4</td>
<td>『精神修養 偉人成功史』 『公益事業の偉業金原明善翁（上）』（『日本青年』第3巻4号） 『公益事業の偉業金原明善翁（中）』（『日本青年』第3巻5号） 『公益事業の偉業金原明善翁（下）』（『日本青年』第3巻6号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1916</td>
<td>大正5</td>
<td>『天龍翁金原明善』 『金原明善翁』（『実力世界』第7巻3号） 『金原明善翁の一話』（『上野教育』第346号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1918</td>
<td>大正7</td>
<td>『大正の大農村青年に告ぐ』 『三大郎の鼻吼』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1919</td>
<td>大正8</td>
<td>『民力涵養 農村青年の為に』 『現代の明徳金原明善翁（1）』（『工業界』第10巻1号） 『現代の明徳金原明善翁（2）』（『工業界』第10巻6号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1920</td>
<td>大正9</td>
<td>『本県郡之林業』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1922</td>
<td>大正11</td>
<td>『優良転花選』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1923</td>
<td>大正12</td>
<td>『金原明善翁略伝』 『金原明善翁の思い出』（『人道』第210号）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1924</td>
<td>大正13</td>
<td>『偉人金原翁を憶ふ』（『新民』第18編2号） 『金原明善翁の面影』（『新民』第18編2号） 『金原明善翁逸話』1～7（『新民』第18編2～8号）</td>
<td>『静岡県人物誌』</td>
</tr>
<tr>
<td>1926</td>
<td>大正15</td>
<td>『故金原明善翁の偉業 天龍運輸株式会社の沿革』</td>
<td>『浜名郡誌』</td>
</tr>
<tr>
<td>1928</td>
<td>昭和3</td>
<td>『修養全集 東西感動美談集』第2巻 『家庭実践 教育訓話読本』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1929</td>
<td>昭和4</td>
<td>『此の人を見よ』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1930</td>
<td>昭和5</td>
<td>『職業指導 人となる道』 『理想の建設と百姓太閤』 『金原明善翁（感謝生活記の巻）』</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1931</td>
<td>昭和6</td>
<td>『富豪伝』</td>
<td>『郷土偉人物語』第2集</td>
</tr>
<tr>
<td>1932</td>
<td>昭和7</td>
<td>『久能読本』 『郷土教育資料』第1集 『少年物語 金原明善』</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

91
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>書籍名</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>昭和8</td>
<td>&quot;看板に誇りなし 金原善翁の風俗&quot;（『日曜報知』第174号）</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和9</td>
<td>&quot;野人野語&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和10</td>
<td>&quot;片平信明翁 金原善翁&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和11</td>
<td>&quot;明治百傑略伝&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和12</td>
<td>&quot;高等小学修身書 巻一 児童用&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和13</td>
<td>&quot;真剣に生きよ&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和14</td>
<td>&quot;金原精神&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和15</td>
<td>&quot;教育勤務と金原先生&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和16</td>
<td>&quot;近世篤農伝 昭和16年10月号&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和17</td>
<td>&quot;あの人この人&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和18</td>
<td>&quot;青少年頑成の書&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和19</td>
<td>&quot;金原善翁&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
<tr>
<td>不明</td>
<td>&quot;土の偉人 金原善翁&quot;</td>
<td>金原善翁の言葉</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【注】本表は、2015年5月時点で筆者が確認した書物の一覧である。
昭和天皇のカリスマ化キャンペーンや「非常時局・総力戦体制の進展」といった。昭和初期にこの社会背景と密接にかかわるかたちで金原が「偉人」として捉えられるようになる。そこで、それまでの伝記とは異なる内容の書物も登場するようになる。たとえば、結城勝吉なる人物は、一〇九三（昭和二三）年に「真剣に生きよ」という、金原に関する四十八の逸話だけをまとめたエピソード集を著し、

昭和五〇年代、およびそれ以降の時代は、金原に対する熱い眼差しが世間から注がれていた時代であった。それはそれは、帝国日本が昭和恐慌を経て軍国化し、中華大陸から東南アジアにかけて侵略戦争を展開していくことになる。そうした風潮があった一方で、山田の認識のなかに金原を「神」と見る残念な指向性は、菅見の限り確認できない。彼の金原に対する認識はただ、洪水という自然災害を抑
山田司海の朝鮮人観と帝国意識

四

山田司海の朝鮮人観と帝国意識

本章では、山田による朝鮮人観の形成過程を考察する。山田は、朝鮮人観を形成する様々な背景を考慮に入れ、当時の社会状況を理解しやすくなることを目的としている。山田は、朝鮮人観を形成する様々な背景を考慮に入れ、当時の社会状況を理解しやすくなることを目的としている。
朝鮮において出版されたかどうか不明である。
内容をみてみると、
「満鉄王国と朝鮮人」や「王道楽土の陰
に皇軍の奮闘」（一）、
「日本化して行く北満の都市」といったタイトルをみて分かる通り、帝国日本化の政策を正当化する言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が繰り返し展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。なかでも、最初の「満鉄王国と朝鮮人」では、植民地支配の正当化される言説が継々展開されている。
川の復旧工事をはじめとして、罹災民の救護に専念したという（66）実際的に、南がどれほど罹災者に「同情」し、いかなる「救護」をしたのか、現時点では不明である（67）と、山田は、その南を総督として迎えた朝鮮の人びとを「幸福なる朝鮮民族」と位置づけたうえで、次のように持論を展開する（86）。

三百万の朝鮮の人達は、挙って南総督を歓迎していたが、その中には南総督が、常に軍服を着て、或は従軍、寺内元帥の行った武断政治を再現するのではなく、先ず金慶の念を抱く者もある。蓋し、その如き懸念は全く無益である。勿論、南総督も寺内元帥の人格高潔、国家に尽くした偉大なる功績は、之を認めても居るが、朝鮮政治に関する限り伊藤博文を中核とし敬慕して居らぬ伊藤公の言行録を常に愛読し、その徳を身辺に掲げて居る事業の如の如きは明かに伊藤宗なる事実を示すものである。

南は「伊藤宗」と見なせるほど伊藤博文を「敬慕」して、山田の姿をみて取ることができよう。南が「伊藤宗」と見なせるほど伊藤博文を「敬慕」して、山田はいかなる意識を持っているのだろうか。先行研究が指摘しているように、寺内による「武断政治」は、日本の植民地支配を強化させるために展開された（68）。採用された東シナ海の同化（同化）をスローガンとした「文化政治」が展開された。
むすびにかえて

本稿では、金原明善という人物が、帝国日本内の領域内において「内地」・「外地」を問わず「偉人」として称揚されていた事実を手がかりとして、職民地支配における作者の職民地観、および帝国市民の存在の意味と、その背景にある「偉人」をめぐる物語の存在の意義について述べた。従来の「偉人」観を改めて見直し、職民地におけりの研究を進めた。これにより、職民地支配における事例の検討を通じて、職民地内の「偉人」と職民地市民の存在を考察した。
してその物語は、『京城日報』における連載記事として終わらず、翌年には書名を変更して『内地』で出版された。

おそらく山田は、単純に『内地』における金原像を『外地』に持ち込んだわけではない。山田が『京城日報』で描いた金原像は、あくまで治水における『偉人』であった。表3にみられるように、一九〇年代の金原に関する書物は、『偉人』と位置づけられていた金原を『内地』で治水の『偉人』と位置づけられていた金原を『外地』で治水の『偉人』と位置づけられたかった山田の強烈な帝国意識が存在していた。第四章でみたように、山田は『文明国』たる日本が朝鮮や満州の『指地認識のもと、帝国日本による殖民地支配を肯定する言説を高に主張していた。そこで、南次郎の植民地政権を高める山田の姿があったが、『京城日報』において金原が顕彰される山田の意義はまさにその点にある。山田は、『内地』で示すこともいう。

したがって、金原が『自治・修養の模範的存在』に位置づけられた山田の文脈において、金原像は、あくまで治水における『偉人』であった。すなわち『天龍川の恩人』は、一九〇年代に見られた他者の書物と一線を画すものだったのである。

このことから、宗主国である日本の『偉人』を示すことで在朝の人びとが治水意識を向上させようという、明白な帝国意識に基づきながら『天龍川の恩人』を掲げたことを指摘できる。この様に考えたとき、翌年『内地』で刊行された『此の人をよめず、その性質が『自治・修養の模範的存在』を示すものと改変された意味が明白である。すなわち、『内地』において求められた金原像は治水の『偉人』でなく、あくまで『自治・修養の模範的存在』だった。

また、『内地』で傾聴される際には若干のアレンジが必要で、『内地』で頒布されるに際しては若干のアレンジが必要である。
施されたのであった。あるいはそこに、発行元である修養団が関係しているとも考えられるが、史料の調査上現時点では明らかにすることが出来ない。ひとまずここでは、山田が書きとめた帝国意識を持ちつつ、朝鮮が植民地であることを念頭に置きつつ「内陸」とは異なるイメージの「偉人」金原明善の伝記を『京城日報』紙上で展開していた点を指摘しておきたい。かかる事実は、これからの伝記が朝鮮の人びとに与えた影響は極めて限られたものだったであろう。朝鮮の人びとがどの様に受け止めかを検討しない限り、金原が顕彰されたことを過大に評価することは出来ない。だが、同一的人物が「内陸」・「外地」という異なる場で同じ「偉人」を顕彰したのは稀れもない事実であり、かつその顕彰は『京城日報』紙上でなされたのである。また、そもそも「偉人」顕彰の研究史において植民地における事例を抜いた研究自体は極めて僅少であることを考慮すれば、本研究の意義は少なからず認められよう。ここでは、『京城日報』という植民地権力に極めて親和的なメディアにおいて、一人の新聞記者が強烈な帝国意識を持ちつつ「内陸」の人間を「偉人」として顕彰し、その「偉人」が言葉の制約を前提として多くの人びとに供された事実が存在した点を指摘しておきた。今後は、こうした植民地において「偉人」とされた事例の掘り起こしを重ねていくことにより、「偉人」顕彰のあり様とそれをそれぞれの地域社会における「偉人」顕彰のあり様とを比較し、両者間における差異や異同を見極めていく必要があるだろう。

その作業はまた、在朝日本人の朝鮮における活動と意義の実態解明にも一定の意義を有すると考えられる。外村氏は、植民地朝鮮における日本人が、政治・経済・文化の実態解明にも一定の意義を有すると考えられる。外村氏は、植民地朝鮮における日本人が、政治・経済・文化の実態解明にも一定の意義を有すると考えられる。彼らに焦点をあてた研究蓄積が希薄であると指摘し、もっとも彼らが動いた活動がどのようなものであったかなど明らかにすることは極めて重要な意味を持っているはずであると述べている。この指摘に鑑みれば、『京城日報』で金原という「偉人」をめぐることと
「偉人」像の受容に関しては、修身教育における金原の位置づけも検討する必要がある。実は金原は、植民地末期（九四四年）の修身教科書にその姿を現している。また、鄭任哲氏の研究によれば、金原は、植民地期台湾においても修身その教材として取り上げられていた時期に至るまで修身教科書に掲載されることがなかった。台湾・朝鮮で取り上げられた情報の受取手の分析と同時に、情報の発信する側の検討も重要である。本稿で取り上げた山田のように、複数の著作を併せて分析することで「偉人」像を明らかにしていく必要があると考える。
（注）
1. 羽賀祥二『政治の神の誕生』京都大学出版会、二〇〇九年。
2. 岸本寛一『政府と地方』、東京大学出版会、二〇〇〇年。
3. 高木道之『地方自治の歴史』、東京大学出版会、二〇〇〇年。
4. 宮間真一『明治・大正期における幕末維新期人物像の形成』、広島大学出版会、二〇〇〇年。
5. 板橋直樹『地方史と近代日本の政治』、岩波新書、二〇〇〇年。
6. 見城伊代『近代政治思想と日本の社会』、ぺリカン社、二〇〇〇年。
7. 若手の研究者を筆頭におけて、総合研究会編『近代政治思想と日本の社会』、ぺリカン社、二〇〇〇年。
8. 土居礼子『政治史』、岩波新書、二〇〇〇年。
9. 有山幸雄『戦時体制と国民化』、年報日本近代史編集委員会編『年報日本近代史』、二〇〇〇年。
新聞記者の道章では、南は「一般市民救済の目的を
赤道の外堤防、礫防、橋梁工事、被災者救いの役目を
副業の助成、救済事業の利用資金融通」などを行ったと
いう（二〇六一〇七頁）。また南の伝記には、彼が京
域に着任して三週後の一九六年（昭和二〇八二月二九
日には永登浦一帯の水害を視察し、周辺地域の被災状況
や河川状況の把握に努め、翌九月四日には中南鮮一帯の
洪水地帯を視察したという。（御手洗辰雄編「次郎
次郎伝記刊行会」）

一方で、広瀬貞三は、洛東江改修工事は事例として総督
府による治水工事の実態を明らかにしている。依瀬貞三

植民地期の治水事業と朝鮮社会、朝鮮史研究会論文
集一、第二七集、一九九五年。それによれば、総督府

が行った治水工事は総督府の強力な統制下のもと朝鮮人
の権利は著しく制限され、工事費用の一部を地域住民に
負担させて行われていたこと、２地域住民の反対運動を
ほぼ無視して工事を進めている結果、新たに水害問題や深刻
な環境破壊を引き起こすなど、様々な問題点が深く


新聞記者の道章、一九〇六年、二十四頁。
110